

# 兵要地誌図と兵要地誌との関連についての一研究： 日本本土の事例を通じて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 九州大学大学院人文科学研究院地理学講座 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 源, 昌久 メールアドレス: 所属: 淑徳大学
URL	<a href="https://doi.org/10.24544/ocu.20180105-009">https://doi.org/10.24544/ocu.20180105-009</a>

<b>Title</b>	兵要地誌図と兵要地誌との関連についての一研究：日本本土の事例を通じて
<b>Author</b>	源, 昌久
<b>Citation</b>	空間・社会・地理思想. 19 卷, p.49-61.
<b>Issue Date</b>	2016
<b>ISSN</b>	1342-3282
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	九州大学大学院人文科学研究院地理学講座
<b>Description</b>	
<b>DOI</b>	10.24544/ocu.20180105-009

Placed on: Osaka City University

# 兵要地誌図と兵要地誌との関連についての一研究

## —日本本土の事例を通じて—

源 昌久\*

Shokyu MINAMOTO

The Relationship of Regional Military Geographies and Military Maps:  
A Study Based on Japanese Mainland Cases

### I はじめに

筆者は先に「日本本土に関する兵要地誌についての一研究：書誌学的アプローチ」(源, 2015)を発表した。アジア・太平洋戦争(1941-1945)末期に本土防衛、帝都東京の防衛のために日本軍は、連合軍の攻撃に対して対策を講じなければならなくなった。このような状況下で本土(内邦)防衛作戦のための参謀本部(1944a) [兵要地誌]『大島』(1944年3月)(以下、「文献1.」と略す)、参謀本部(1944b)『八丈島兵要地誌資料 附、青ヶ島、小島』(1944年3月)(以下、「文献2.」と略す)、参謀本部(1944c)『八丈島、大島兵要地誌 附青ヶ島、』(1944年6月)(第一編八丈島を以下、「文献3-1.」、第二編大島を以下、「文献3-2.」と略す)が調製(作成)された。これら3冊の兵要地誌類について前述の拙稿で検討を試みた。それを引き継ぎ、本稿は、兵要地誌に対応して作成されたと思われる兵要地誌図に関する研究である。兵要地誌図と兵要地誌とはどのような関係にあるのかを解読することが本稿の目的のひとつである。研究を始めると、兵要地誌の作成者(機関)は兵要地誌図のそれと同一のであるのか。地誌の地理的情報は地誌図にどのように反映されているのか。地誌図は地誌に比較し、一見して地域全体を概括的に見渡す利便性がある。この利点を活用しているのであろうか。その他、いくつもの疑問点が生じた。

本稿では兵要地誌図全体を検討するのではなく、限定された2点の内邦の地誌図を考察するにとどめる。限界はあるが、兵要地誌図と兵要地誌との関係を解明する基本的素材のひとつを提供するつもりである。

ここでも兵要地誌研究と同様に日本軍の空間認識の在り方、地理的思考を探るヒントをも得たい。

原資料、書名(タイトル)、引用文等の記載に際し、

旧字体(正字)は新字体に原則として変換した。

### II 兵要地誌図のアウトライン

後述する2点の兵要地誌図を考察するに際し、本稿に関わる事項を中心に地誌図の概略的内容を先行研究に基づいて記してみたい。

#### 1. 名称・語義

「兵要地誌図」の同義語(シノニム)が存在している。

小林(2003: 44-46)の「兵要地誌図(大阪大学[大学院]文学研究科人文地理学教室所蔵)目録」を調べてみると次のような結果が得られた。

目録には75図のタイトルが掲載されている。タイトルを見ると、「○○地誌図」が24図で全体の32%である。同様に、「○○兵要地誌図」22図で約29.3%。「○○兵要地誌資料図」15図で20%。「○○図」13図で約17.3%。他1図。

お茶の水女子大学文教育学部地理学教室(2007: 204-205)作成『お茶の水女子大学所蔵外邦図目録』の「兵要地誌図」(No.15046 ~No.15099)の項を調べると次のような結果が表れた。

目録には54図のタイトルが掲載されている。「○○兵要地誌図」32図で約59.2%。「○○兵要地誌資料図」12図で約22.2%。その他(局地図、地誌図、要図等)3図。タイトルなし7図。

今里・久武(2003: 34)がアメリカでの調査結果である「今回確認した兵要地誌図(LC, AGS所蔵分)」では前述の二目録で使用された用語以外に、「給水地分布図」、「作戦用地誌図」、「応急版作戦図」等が見られる。

国立情報学研究所(2016)によって構築された

\* 淑徳大学 総合福祉学部

データベースに基づく情報サービス「Webcat Plus」<sup>1)</sup>を利用して一致検索を試みた。

「兵要地誌図」のタームで51件がヒットし、内有効50件。「地誌図」95件ヒット、内有効90件。「兵要地誌資料図」41件ヒット、全件有効。

以上から兵要地誌図、兵要地誌資料図、地誌図の用語が多く使用されていることがわかる。これらの語間の相違点については、今後の課題としたい。小林(2003: 43)は、「本目録(筆者注: 兵要地誌図(大阪大学[大学院]文学研究科人文地理学教室蔵)目録)に記載する図のタイトルに「兵要地誌資料図」とあるものについては、とくにその付図として作製されたことがうかがえる」と記し、示唆を与えている。

これらの地図は一枚ものの兵要地誌図の名辞である。この他に、後述する「特種兵要地誌図」(特種地誌図)が存在している。これは一枚ものの地図の他に、冊子体の兵要地誌中にしばしば、附図、折り込み地図(とじ込み地図)、付属資料の形態でみられる。

#### 語義(内容)

兵要地誌図の内容について、先行研究から引用してみよう。

小林(2003: 43)は次のように述べている。

「兵要地誌図」は、一般図の多い外邦図のなかでは特別のジャンルを構成すると考えられる。本目録にみられる「兵要地誌図」の多くは、一般図に軍用車両の通過可能性など、各種軍事情報を記入したもので、基本的に多色刷りとなっている。またその大部分は、ベースマップとなった一般図に関する情報も記載する。(下線筆者)

今里・久武(2003: 33)は次のように述べている。

兵要地誌図とは、道路の通行、海岸への着船、航空機の離着陸、水の供給、地誌一般、集落の人口など、軍事作戦に必須の情報が詳細に記入された地図で、地形図(時には現地あるいは宗主国が作製したもの)の上に朱・青・緑などの文字・記号・線・面などが上刷されている。また空中写真要図とは、例えば河川とその周辺部のみを空中写真撮影し、それをスケッチ風に平面図化した応急作戦図である。(下線筆者)

これらの二つの兵要地誌図の内容についての見解は、一枚ものの兵要地誌図を想定しているよう見受けられる。下線とは異なり、特種兵要地誌図では黒の単色のものが多数、存在している。軍事情報の一

部である現地での食料(糧)生産物に関する(例えば、ゴマ、甘藷等の畑)<sup>2)</sup>も見られることを付言しておく。現時点では、筆者は前述のことを鑑み、「兵要地誌図」は、軍用図の一種であり軍事作戦(攻撃・防衛共に)を遂行する目的をもって、一般用地図(基図)に加刷、改変したり、特別に編集したものと考えている。

## 2. 兵要地誌図に関する例規(規程)

兵要地誌図がどのような規程に基づいて調製(作成)されたのかを調べて見よう。

1) 『兵要地理資源調査報告例規』(大本営陸軍部、1944)<sup>3)</sup>

本書の第一篇 総則 にて大本営陸軍部(1944: 1-2)は、兵要地誌図にて次のようにのべている。

一、報告ハ兵要地誌図、特種兵要地誌図兵要地誌図、資源調査表及報告書ヲ以テ行フを本則トス

二、(略)

三、特種兵要地誌図ハ兵要地誌図ヲ補足スル目的ヲ以テ所要ノ事項ニ就キ地誌図調製ノ様式ニ準ジ更ニ詳細ニ記載スルモノトス 之ヲ例示セバ左ノゴトシ

地勢概見図、道路網図、河川水運図、給水図、通信網図、市街図、伝染病分布図等

四、地誌図及特種兵要地誌図ノ為ニハ適宜ノ地図又ハ要図ヲ利用スルモノトス

以上のごとく、兵要地誌図の補足として、更に詳細な内容を地図化するものとして諸種の特種兵要地誌図を位置付けている。

2) 『関東軍兵要地誌調査参考書』(関東軍参謀部、1936)

本書の第二編 報告要領 第五章兵要地誌図資料報告要領にて関東軍参謀部(1936: 12-13)は、次のようにのべている。

一、五十万分一兵要地誌図ハ主トシテ高等統帥、十万分一兵要地誌図ハ主トシテ部隊ノ運用ニ資スルモノニシテ良ク地形図ノ欠ヲ補ヒテ兵要地誌の状態ヲ一目瞭然タラシメサルヘカラス

二、五十万分一兵要地誌図ニ於テハ地勢、交通網、河川及湿地、森林、飛行場等大局ニ影響ヲ及ホス事項ヲ図示シ以テ大局的地形判断ニ資ス

三、十万分一兵要地誌図ハ兵要地誌の事項中地図図々式ヲ以テ現示シ得サル事項又ハ現示十分ナラサル事項特ニ天候季節ニ因ル変化ヲ記述シテ現用地形図ノ欠ヲ補足セサルヘカラス  
又図示事項ハ直接部隊ノ運用ニ重要ナル関係ヲ及ホスモノニ重点ヲ置クヲ要シ記載徒ニ多クシテ簡明ヲ欠クハ適当ナラス

四、(略)

五、(略)

以上のごとく、10万分の1兵要地誌図と50万分の1兵要地誌図と関係について、記されている。駐蒙軍参謀部調製(1938: 註記<sup>4)</sup>)「多倫一徳化一平地泉附近兵要地誌資料」によると、この地域では「十万分一兵要地誌図及同地形図ヲ作戰用トシ五十万分一兵要地誌図及同地形図ヲ補助用トス」と記されている。藤原(1992: 41-43)によると、10万分の1図が整備され、それに基づき後に10万分の1を調製したとの報告もなされている。

縮尺は、10万分の1、50万分の1の他に20万分の1図等種々のものが見られる。

### 3. 作成機関(1941～1945年)

兵要地誌図の作成機関について、中央機関と現地組織とに分けて、解説を行う。

#### 1) 中央機関

大本営陸軍部および参謀本部(1943年10月15日～1945年)が兵要地誌図を作成する。

参謀本部服務規則を1943年10月15日に改定した。この改定はほぼ大本営陸軍部(1943)と同じである。

第一部から第三部で構成され、兵要地理関係は第二部が担当する。第二部の内訳・内容を簡略に、つぎに記す。

##### 第二部

第四班: 対外一般の総合情勢判断に関する事項。地図、測量に関する事項。

第五課: 対ソ作戰情報に関する事項。兵要地理(朝鮮、樺太を含む)の調査。

第六課: 対米英作戰情報に関する事項。南方諸邦(印度、豪州を含む)の軍事、兵要地理(朝鮮、樺太を除く国内兵要地理を含む)の調査。

第七課(通称、大陸七課): 対支作戰情報に関する事項。中華民国の軍事、兵要地理の調査。

第二部内で担当地域の班・課で兵要地誌図を作成されていた様子がうかがえる。

第二部内(第七課)での実際の兵要地誌図作成作業の報告を成果とともに石井(2012: 50-54)が記している。

情報担当(1944-1945)であった渡辺正参謀(1916-2013)について、金窪(2005: 122)はおそらく、渡辺からの聞き取りの結果を踏まて、「渡辺参謀は第二部内で第七課、第六課と移り、その後、主として第四班において、情報に関する総合情勢判断、兵要地誌、および陸地測量部の管轄を担当し、…」と紹介している。第二部内での地理情報関係の仕事の状況を表している。さらに、陸地測量部が参謀本部のこれらの諸課の調査資料に基づき兵要地誌図の作成を行う事例ものべられている<sup>5)</sup>。

#### 2) 現地組織

現地(中国、南方等)の部隊によって兵要地誌図が作成される。

たとえば、関東軍司令部(1936: 附表)の「兵要地誌的作戰準備ノ担任区分表」では(調査要目)作戰用地図ノ整備(担任区分)軍司令部、各兵団、所命部隊及所命特務機関と記され、関東軍の上記機関で兵要地誌と同様に兵要地誌図類が作成されていたことが判る。

田中(2005: 83-88; 2009: 299-303)は、戦地における外邦図(作戰図を含む)作成・地図情報の収集について子細に報告している。

本稿に関係する東部軍司令部についてのべておく。文献2・3-1・3-2は各々の「註」から1944年時の東部司令部が作成あるいは関与した資料である(源, 2015)。地誌図も同様なのであろうか。後述の対象地誌図の作成者は、参謀本部と明記されている。現地(下部)組織として、参謀本部(大本営)→東部軍司令部が存在している。現時点では、東部軍司令部内の地理情報関係の部署(担当)は不明である。「決戦作戰情報収集計画」(第一総軍司令部, 1945)によると、第一総軍司令部内には、「地図ノ現地調製」、「地図業務ニ関スル事項」を担当する部署が存在していた。東部司令部についての調査は、今後の課題である。

### 4. 兵要地誌図図式

兵要地誌図の作成に際して、使用する図式の規程を述べてみよう。

1) 『兵要地理資源調査報告例規』(大本営陸軍部, 1944)

「附図第一」に「兵要地誌図式」が付されている。「注

意事項」「区分」「図式」「説明」から構成されている。「注意事項」は、後述の解説に関係しているので、ここに引用しておく。

- 一 本図式ニ規定セザル事項ハ地形図図式軍隊符号等ヲ応用シ勉メテ簡明ナラシムモノトシ
- 二 着色ハ下記ニ依ルモノトス
  - 1 道路、住民地、飛行場名等ニ関スル事項及一般ノ註記…橙色
  - 2 河川、湿地、給水及地名等ニ関スル事項…藍色
  - 3 森林等ニ関スル事項…緑色
- 三 (略)

一に記されているように、本図式以外に軍隊符号に定められている記号、略号をも使用している。着色も兵要地誌図を解説する際に有効である。

## 2) 『関東軍兵要地誌調査参考書』(関東軍参謀部, 1936)

本書の「附表第二」に「関東軍兵要地誌図図式」が付されている。「区分」「図式」「摘要」から構成されている。

本図式には1)の区分に掲載されていた「鉄道」「其ノ他」が記されていない。「区分」名称が同じでも「図式」が異なっているものもある。

今里・久武(2003: 35)が指摘しているように該当地域の気候・地形・戦況などに応じて兵要地誌図図式他は相違点が生じている。

例えば、中部太平洋方面の「兵要地誌図図式」(備七九二〇部隊参謀部1944: 備考)には「本図式ハ中部太平洋島嶼ノ特性ヲ考慮シ特殊事情ニ関シ補備セルモノナリ」と記されている。図式の「区分」には紅樹林(マングローブ)、椰子林が記載されている。

## 5. 刊行年(製版)(一枚ものの兵要地誌図)

刊行年(製版)を調査するために、先行研究の資料を参照してみよう。

「兵要地誌図(大阪大学 大学院文学研究科人文地理学教室所蔵)目録」(小林, 2005: 44-46)では、最も早い製版時期で1934年(1936年修正)。大半は1938年から1944年の間である。

『お茶の水女子大学所蔵外邦図目録』(お茶の水女子大学文教育学部地理学教室, 2007: 204-205)では、製版時期1942年から1944年の間である。

1937、1938年頃から兵要地誌図(外邦図に属する)の刊行が急激に増加する。アジア・太平洋戦争末期になると、帝都防衛を意識し、本稿で対象とする伊豆七島、小笠原諸島周辺の地誌図が作成されるようになる。

## 6. 大きさ(一枚ものの地図)

地図の寸法を表記する法は、いくつもある。印刷用紙の寸法で、国土地理院で採用されている柀判(460mm×580mm)、四六判(788×1,091mm)の名称である。この名称をもとに「中」、「大」とするものもある。

「兵要地誌図(大阪大学[大学院]文学研究科人文地理学教室所蔵)目録」(外寸をmmまで表示)を調べてみると、近似値で四六判が24図で42%、柀判が13図22.8%である。

『お茶の水女子大学所蔵外邦図目録』(柀判を基準に「中」、その倍「大」)を調べてみると、「大」が25図46.3%、柀判が9図16.7%である。

これら2コレクションの結果を見る限り、柀判、四六判および柀判の倍サイズの地図用紙が約半数を占めた。

筆者は、地図の寸法を表記する法として、「柀判」を基準とする方式を本稿では以後、採用しない。『日本目録規則 1987年版改訂3版』(日本図書館協会目録委員会, 2006)で記されている(地図史料の)「4.5.3.2(記録の方法)一枚ものの地図資料は、縦、横の長さを「×」印で結び、…単位はセンチメートルとし、端数を切り上げる」の方式に統一する。

## III 日本本土の兵要地誌と兵要地誌資料図との比較

ここでは、文献1、文献2、文献3-1、文献3-2(表1参照)とそれらに対応している兵要地誌資料図参謀本部(1944d)「伊豆七島兵要地誌資料圖」(筆者未見、スキャナ・カラー版を使用)(以下、「図A」と略す)(図1参照)(表2参照)、参謀本部(1944e)「八丈島兵要地誌資料圖」(筆者未見、スキャナ・カラー版を使用;以下、「図B」と略す)(図2参照)(表3参照)とを比較、検討する。その際に、対象資料を量的(統計的)手法により分析を行うことも可能であるが、本稿では質的手法により地図と地誌資料図との関係を考察する。

地誌と図を比較する手段として、以下の点に留意した。

- ・ 文献1～文献3-2.中にふくまれる挿図、附図、折り込み地図(とじ込み地図)をリスト化した(表4～表7参照)。それらの文献に記述されている事項が、資料図に対応し、反映されているかを検討する。
- ・ 逆に、資料図中に記されている注(註)記、図式が地誌中に記載されているか。
- ・ 地誌と資料図との同一事項に関する数値データを比較する。
- ・ 軍事(防衛)作戦上、重要な事項が資料図中で欠落していないか。

**1. 大島に関する文献 1、文献 3-2. と図 A との比較**  
 各々の刊年(製版年)、機密度を列挙してみる。

	刊年(調製年)	機密度
文献1.	1944.3	極秘
文献3-2.	1944.6	極秘
図A(分図:「大島」) <sup>7)</sup>	1944.4	*

\*:「軍事極秘(戦地ニ限り「軍事秘密」トス)を二本線で抹消し、軍事秘密(戦地ニ限り「極秘」を押印)」<sup>8)</sup>

図Aが調製され時期から推定すると、文献3-2.は図Aに影響していないことになる。しかし、実際には両者は関連している。

- ・ **1-a)** 文献1.のNo.6と文献3-2.のNo.1とを組み合わせた内容で図A(大島)中の「落下傘部隊降下適地」(落下傘を符号化)(赤)、「上陸適地」(→)(赤矢印)、「上陸可能地」(⇒)(白抜き赤矢印)等が記されている。敵軍の島への侵入を予測して、作図されたように見受けられる。軍隊符号(小林, 1940: 1)では、(軍隊符号 使用上の要則)「第三条…我が軍ニ為ニハ藍色ヲ、敵軍ノ為ニハ赤色ヲ用フルヲ通常トス」と記されている<sup>9)</sup>。文献3-2.のNo.1に記載されている差地木村隣接の飛行場適地(茶色)は図Aに同じく飛行場適地の記号(赤色(橙色?))でしめされている。文献3-2.のNo.8に記載されている日本軍用の北山飛行場(黒色)は図Aに赤色(橙色?)で示されている。
- ・ **1-b)** 図A(大島)の六カ村すべての住民の総戸数、人口、宿営力のデータ(戸数(人口/宿営力))は、文献3-2.のp.83-84(調査年不記)に記載されている数値と同一である。
- ・ **1-c)** 図A(大島)中の漁船数は、文献1.のp.33の「漁船各村別一覧」の合計数と同じ。文献3-2.のp.96の「漁船各村別一覧」の合計数とは異なる。
- ・ **1-d)** 「水」(給水)は宿営をはじめ軍事作戦上、

重要な意味を有している。文献1.のp.4にて大島の水事情について、「一、二ノ湧水ヲ認ル外地水ヲ得難ク住民ハ天水ヲ飲用ニ充ツル...」と記されている。文献3-2.のNo.1に記載されている「飲料水(天水、水道、井戸)」の記号(藍色)は、図Aと記号、位置共に概ね一致している。

- ・ **1-e)** 図A(大島)に独自に記載されている事例。図Aは「五万分一陸海編合図伊豆七島」を基図としているので、海図図式(潮流、水深等)が記される。港附近の説明、突堤長さ、「[日本軍の]魚雷艇基地トシテ適當…」(すべて藍色)も図のみの事項である。
- ・ **1-f)** 図郭の区域内に記載された注記(赤(橙)色)は、文献1.、文献3-2.の内容(地勢、交通、気象、海流、産物等)を参照しているのではないか。ただし、文体は異なっている。

**2. 八丈島に関する文献 2. 文献 3-1. と図 A (分図「八丈島」) との比較**

図A(分図「八丈島」)<sup>10)</sup>の調製年月、機密度は、図A(分図:「大島」と同様である。

- ・ **2-a)** 文献3-1.のNo.4中の「[敵軍の]「空輸部隊着陸可能地」は、図A(八丈島)に記載されていない。飛行場(適地)はほぼ同様である<sup>11)</sup>。文献2.のp.5に記述されている海軍飛行場は、図A、図B両方にしめされていない<sup>12)</sup>。
- ・ **2-b)** 文献3-1.のNo.5と図A(八丈島)と比較すると、前者には「[敵軍の]「重材料上陸地点」「重材料ノ上陸可能」が記されているが、後者には記載されていない。しかし、図A(八丈島)には図A(大島)と同じように「[敵軍の]「上陸適地」「上陸可能地」の矢印(赤色)は付されている。
- ・ **2-c)** 図A(八丈島)の五カ村のすべての住民の総戸数、人口のデータは文献3-1. p.25(調査年: 1944年4月)、宿営力のデータは文献3-1. p.36(調査年: 1944年4月)に記載されている数値と同じである。なお、文献2.のデータは1943年末である。
- ・ **2-d)** 図A(八丈島)には水源は示されている。文献3-1.のNo.3では「飲料水供給源」(赤(橙)色)「飲料用土管」(赤(橙)色)が表記されているが、図とは異なる。図A中の土管の注記で「海軍監視隊ニ於テ利用ス」と記載し、自軍での活用も考慮していることが判る。
- ・ **2-e)** 海図図式に関しては、図A(八丈島)と文献2. No.4および文献3-1. No.17(水深なし)とは表記が異なる。港附近の説明(藍色)が付されている。

- ・ 2-f: 図郭の区域内に記載された注記(赤(橙)色)は、地勢、港湾、気象・海象、は文献と異なる。人口(戸数、総人口)(1943年3月調)は文献3-1. p.36(調査年: 1944年4月)と同様。産物(1941年調)は文献3-1. p.31-33である。

### 3. 八丈島に関する文献 2. 文献 3-1. と図 B(八丈島)との比較

図Bの製版年月は1944年3月である。機密度は、図Aと同様である。縮尺は、約1:20,000で図Aとは異なる。

- ・ 3-a: 文献3-1.のNo.4中の「敵軍の」[空輸部隊着陸可能地](六カ所)は、図Bに記載されている場所(二カ所)とは異なる。一カ所は位置も異なる。飛行場(適地)は文献2.のp.5の文章と一カ所がほぼ同じである。
- ・ 3-b: 敵の上陸適地(可能地)の表示が図Bでは明確である。軍隊符号の「F」(敵を意味する)、舟艇の符号(∩)を使用している。図Aでは「F」符号は使用されず、赤色から「敵」軍の上陸と判断した。図Bにおいては、さらに矢印の脇に赤字で海岸線に沿い解説(「奇襲上陸可能ナリ」等)が多数、注記されている。図Bの縮尺が約1:20,000であるため、海岸線の地形・様子が図Aに比較し、より精確である。これは、図Bの一つの特徴である。敵の上陸対策を重視している姿勢が見られる。
- ・ 3-c: 図Bの図郭の区域内に「水ニ就テ(西山麓)」が注(注)記(藍色)として記載されている。この記述は、文献3-1. No.3とはことなり、独自のもの。図B中に水源(藍色)および注記が記載されている。
- ・ 3-d: 文献3-1. No.11中の海底電線が図Bに赤色で記載されている。
- ・ 3-e: 図Bには産業、人口、戸数、宿営力のデータは記載されていない。
- ・ 3-f: 図Bには注記(赤色)にて、軍事作戦が記されている。例えば、「ゲリラ作戦ニ適ス 此ノ地帯雑木林茂シ所」「攀登通過困難ニシテ軍隊ノ行動自由ナラズ」と記されている。

## IV おわりに

結語にかえて、IIIにおける兵要地誌と兵要地誌図との比較から次のようにまとめてみた。

図A、図Bともに、1943年11月15日、教育総監部(1943: 27)により作成された『島嶼守備部隊戦闘教令(案)』に呼応している。本教令(案)第四十三に「敵ノ上陸ニ方リテハ為シ得ル限り水際ニ於テ之ヲ撃滅スルヲ要ス」と記載されている。敵軍に対しての上陸防衛は、海岸に直接配備・水際撃滅を主眼としていた。両図とも原則として、作戦は、攻撃ではなく防衛である。2-b,3-bはそのような作戦向きに図示されていることを示す。

水(給水)に関して、日本軍にとっての活用をも考慮してか、1-d,2-d,3-cのように兵要地誌・地誌図ともに記載されている。

敵軍の空輸部隊着地可能地、落下傘降下地を1-a,2-a,3-aに記したように可視化している。

図A中のデータは、1-b,2-fに見られるように、文献3.つまり1944年6月に刊行された資料に記載されたものと同様である。4月以前の段階で地図作成者(機関)はデータを入手していたのであろうか。

図Bは図Aに比較すると、文献からの直接引用が少ない。

兵要地誌の作成者は1-f,2-f,3-cから見ると、兵要地誌図のそれとは同一ではないと想像される。しかし、同一数値データを両方で散見することから同一部署内あるいは近い立場の人物であろう。

本稿が対象とした兵要地誌と兵要地誌図との間には、対応関係が存在したと筆者は推察する。

## 付記

本稿を作成するにあたり、貴重な資料の複写・許可に協力して下さった、小林茂大阪大学名誉教授、熊谷圭知お茶の水女子大学教授、大阪大学大学院文学研究科人文地理学教室、お茶の水女子大学文教育学部地理学教室、東北大学大学院理学研究科地理学教室、海図の閲覧を許可して下さった高橋健太郎駒沢大学教授の方々に御礼申し上げる。本研究の一部は、2015年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(B)(一般))研究課題名:「「コモンズ」をめぐる思想・理論。社会的実践に関する地理学的研究」(研究者代表:遠城明雄 課題番号:26284132)の研究集会(2015年12月24日、広島県福山市 国民宿舎 仙酔島)にて発表され、参加者から有意義なご助言をえた。参加された皆様にも厚く御礼を申し上げます。なお、本稿は前記研究補助金を使用させていただいた。

## 注

- 1) Webcat Plusは、国立国会図書館、大学図書館等種々の組織からの情報源を統合して生成されている。国立情報学研究所のサイト(2016: Webcat Plusとは)によると、(当サービスは)「現状、データの制度はまだまだ不十分ですが…」と記されている。
- 2) 例えば、参謀本部(1939)「北海南寧附近五十万分之一地誌図」の図中の註記で、「遂溪—安鋪沿道ハ一般ニ畑地ニシテ胡麻、甘藷等多ク栽培セフル…」と表記されている。
- 3) 本書の解題は、源(2005: 47-49)を参照。
- 4) 「注記」と「註記」の表示について。測量・地図百年史編集委員会(1970: 221)は、(注記を)「昭和23[1948]年以前は註記と書いた」と記載している。
- 5) 例えば、アジア・太平洋戦争後半時の陸地測量部の作業状況を長岡(1993:13)が記している。
- 6) この「記録の方法」は、国立国会図書館の地図情報の書誌記述に採用されている。
- 7) 防衛庁防衛研修所戦史室(1971: 付図第2)は、「大島配備要図」(原図筆者未見)として1945年8月終戦時における日本軍の状況を記載している。
- 8) 機密度に関連し、長岡(塚田・富澤, 2009: 313-312)は質疑応答のなかで、「戦地においては軍事極秘」とうのがときどきあります。私が昔聞いた話では地図がなくなることもあるので、そういう場合に責任を少し落とすために、「戦地においては何とか」となどという分類があると…」と問い、富澤章は肯定している。
- 9) 日本軍が藍色を自軍の作戦に使用した図を防衛省防衛研究所 戦史研究センター史料室(以下、「防衛室」と略す)で見出した。『八丈島兵力位置図』(請求記号: 本土 配備図 67)である。これは、「八丈島及青カ島要圖」上に青色鉛筆で日本軍の兵力の配置を記した作戦図である。
- 10) 防衛庁防衛研修所戦史室(1971: 付図第2)は、「八丈島配備要図」(原図筆者未見)として1945年8月終戦時における日本軍の状況を記載している。
- 11) 源(2015: 8)では、文献3-1のNo.4について敵軍がプランする飛行場(適地)と明言していなかった。この図の示すものは、日本軍が予測していた「敵軍」の飛行場(適地)を示している。文献3-2のNo.1も同様である。
- 12) 1945年2月時点の八丈島の図(筆者未見)を山田(2012: 付図3)が紹介している。その付図には、日本軍の飛行場が3カ所、記載されている。

## 文献

- 石井素介 2012. 参謀本部大陸第七課作成の兵要地図資料. 外邦図研究ニュースレター 9: 50-54.
- 今里悟之・久武哲也2003. 在アメリカ外邦図の所蔵状況——議会図書館・AGS Golda Meir図書館・ハワイ大学ハミルトン図書館の調査から. 外邦図研究ニュース [ズ] レター 1: 33-36.

- お茶の水女子大学文教育学部地理学教室 2007. 『お茶の水女子大学所蔵外邦図目録』お茶の水女子大学教育学部地理学教室.
- 金窪敏知 2005. あとがき 渡辺正氏所蔵資料集編集委員会編 『終戦前後の参謀本部と陸地測量部—渡辺正氏所蔵資料集』 123-124. 大阪大学文学研究科人文地理学教室.
- 関東軍参謀部 1936. 『関東軍兵要地誌調査参考書』関東軍参謀部.
- 関東軍司令部 1936. 『関東軍兵要地誌資料調査規程』関東軍司令部.
- 教育総監部 1943. 『島嶼守備部隊戦闘教令(案)』教育総監部.
- 国立情報学研究所 2016. Webcat Plus. [http://webcatplus.nii.ac.jp/faq\\_001.html](http://webcatplus.nii.ac.jp/faq_001.html)(最終閲覧日: 2018年1月31日)
- 小林茂 2003. 「兵要地誌図」(大阪大学大学院文学研究科人文地理学教室所蔵) 目録. 外邦図研究ニュース [ズ] レター 1: 43-46.
- 小林又七 1940. 『軍隊符号』(作戦要務令附録其ノ一) 川流堂 小林又七.
- 参謀本部 1939. 「北海南寧附近五十万分之一地誌図」参謀本部.
- 参謀本部 1943. 『参謀本部服務規則』参謀本部.
- 参謀本部 1944a. 『大島』(伊豆諸島兵要地誌資料其ノ一) 参謀本部.
- 参謀本部 1944b. 『八丈島兵要地誌資料』(伊豆諸島兵要地誌資料其ノ六) 参謀本部.
- 参謀本部 1944c. 『八丈島、大島兵要地誌資料 附、青カ島、小島』参謀本部.
- 参謀本部 1944d. 『伊豆七島兵要地誌資料図』参謀本部.
- 参謀本部 1944e. 『八丈島兵要地誌資料図』参謀本部.
- 参謀本部[1945?]. 『八丈島兵力位置図』[参謀本部].
- 測量・地図百年史編集委員会 1970. 『測量・地図百年史』日本測量協会.
- 備七九二〇部隊参謀部 1944. 『兵要地誌図図式』[備七九二〇部隊参謀部] (アジア歴史センターのレファレンスコードは「Rec.」と以下、略す. Rec. A03032051200)
- 第一総軍司令部 1945. 決号作戦情報収集計画. [第一総軍] 参謀部庶務『高級参謀会同配布書類』(頁付けなし).
- 大本営陸軍部 1943. 『大本営陸軍部幕僚業務分担規定』大本営陸軍部. (Rec. C12120412800)
- 大本営陸軍部 1944. 『兵要地理資源調査報告例規』大本営陸軍部.
- 田中宏巳 2005. 敗戦にともなう地図資料の行方. 外邦図ニュースレター 3: 83-92
- 田中宏巳 2009. 南西太平洋方面における地図資料. 小林茂編 『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域——「外邦図」へのアプローチ』299-304.
- 駐蒙軍参謀 1938. 『多倫—徳化—平地泉附近兵要地誌資料』(蒙疆地区兵要地誌資料第2号) 駐蒙軍参謀. (Rec. C01003371800)
- 長岡正利 1993. 陸地測量部外邦図作成の記録——陸地測量部・参謀本部外邦図一覧. 地図31(4): 12-25.
- 塚田健次郎・富澤章 2009. 終戦前後の陸地測量部. 小林茂編 『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域——「外邦図」へ

- のアプローチ』305-325.  
 日本図書館協会目録委員会 2006.『日本目録規則 1987年版  
 改訂3版』日本図書館協会.  
 藤原彰 1992.『外邦兵要地図整備誌』(十五年戦争極秘資料集  
 30)不二出版.  
 防衛庁防衛研修所戦史室 1971.『本土決戦準備<1>—関東  
 の防衛』(戦史叢書)朝雲新聞社.  
 源昌久 2005. 兵要地誌類関係資料の解題 渡辺正氏所蔵資料  
 集編集委員会編『終戦前後の参謀本部と陸地測量部—渡  
 辺正氏所蔵資料集』44-51. 大阪大学文学研究科人文地理学  
 教室.  
 源昌久 2015. 日本本土に関する兵要地誌についての一研究  
 —書誌学的アプローチ. 淑徳大学研究紀要(総合福祉学  
 部・コミュニティ政策学部)49: 1-14.  
 山田平右ヱ門 2012.『八丈島の戦史』(改訂版)郁朋社.  
 陸地測量部 1944.「内邦地域地図整備目録 其二」(本図(筆者  
 未見)の複製を使用).『地図』1993年31(4)添付地図)

表1 文献1、文献2、文献3-1、文献3-2の書誌事項

## 文献1.『大島』

[東京] 参謀本部 1944年3月[本文]第1頁—第38頁; 22cm. —(伊豆諸島兵要地誌資料 其ノ一)  
 〈防衛室〉<sup>注1</sup>(駒澤大学図書館) (「極秘」)  
 (内容)目次<sup>注2</sup>  
 一大島警備ノ為地形判断 二位置、広袤及歴史 三地形地質 四海岸及海面 五気象 六交通 七通  
 信 八住民 九産業 十風俗  
 注1. 防衛室は同名図書を二冊所蔵。表表紙に「一復史料」の捺印がある。「一復史料」とは陸海軍省の廃止につき、1945年  
 12月1日設置された第一復員省(1946年6月15日廃止)に移管された史料である。  
 注2. 筆者作成。

## 文献2.『八丈島兵要地誌資料 附、青ヶ島、小島』

[東京] 参謀本部 1944年3月  
 註[1]頁 地図[1枚] 目次第1頁—第3頁 [本文]第1頁—第55頁 附図3図 附表五表; 22cm. —(伊  
 豆七島兵要地誌資料 其ノ六)  
 〈防衛室〉<sup>注1</sup>(「極秘」)  
 (内容)目次<sup>注2</sup>  
 第一章位置及面積広袤 第二章地勢 第三章港湾 第四章村邑 第五章交通 第六章通信第七章気象  
 及海象 第八章衛生 第九章住民 第十章産業 第十一章沿革 附第一青ヶ島 第二小島 附表第一  
 —第五 附図第一—第三  
 注1. 防衛室は同名図書を二冊所蔵。表表紙に「一復史料」の捺印がある。  
 注2. (内容)は章名のみ列挙。節名は略す。

## 文献3.『八丈島、大島兵要地誌 附、青ヶ島、小島』

[東京] 参謀本部 1944年6月.  
 註[1]頁 目次第1頁—第7頁 本文第1頁—第98頁  
 〈防衛室〉<sup>注1</sup>(「極秘」)  
 (内容)目次<sup>注2</sup>  
 第一編八丈島(文献3-1.)  
 第一章位置及面積、沿革 第二章地勢並ニ施設ノ状況 第三章村邑 第四章交通 第五章通信 第六  
 章気象及海象 第七章住民 第八章産業 第九章宿営力並ニ現地自活力 第十章其ノ他 附第一小島  
 附第二青ヶ島  
 第二編大島(文献3-2.)  
 第一章大島警備ノタメノ地形判断 第二章位置、広袤及歴史 第三章地形地質 第四章海岸、港湾ノ  
 状況並ニ海象(上陸適地ノ状況) 第五章飛行場及飛行場適地ノ状況 第六章気象第七章交通 第八章  
 通信 第九章住民 第十章産業 第十一章衛生 第十二章其ノ他  
 注1. 防衛室は同名図書を三冊所蔵。表表紙に「一復史料」の捺印がある。  
 注2. 節の細目は略す。

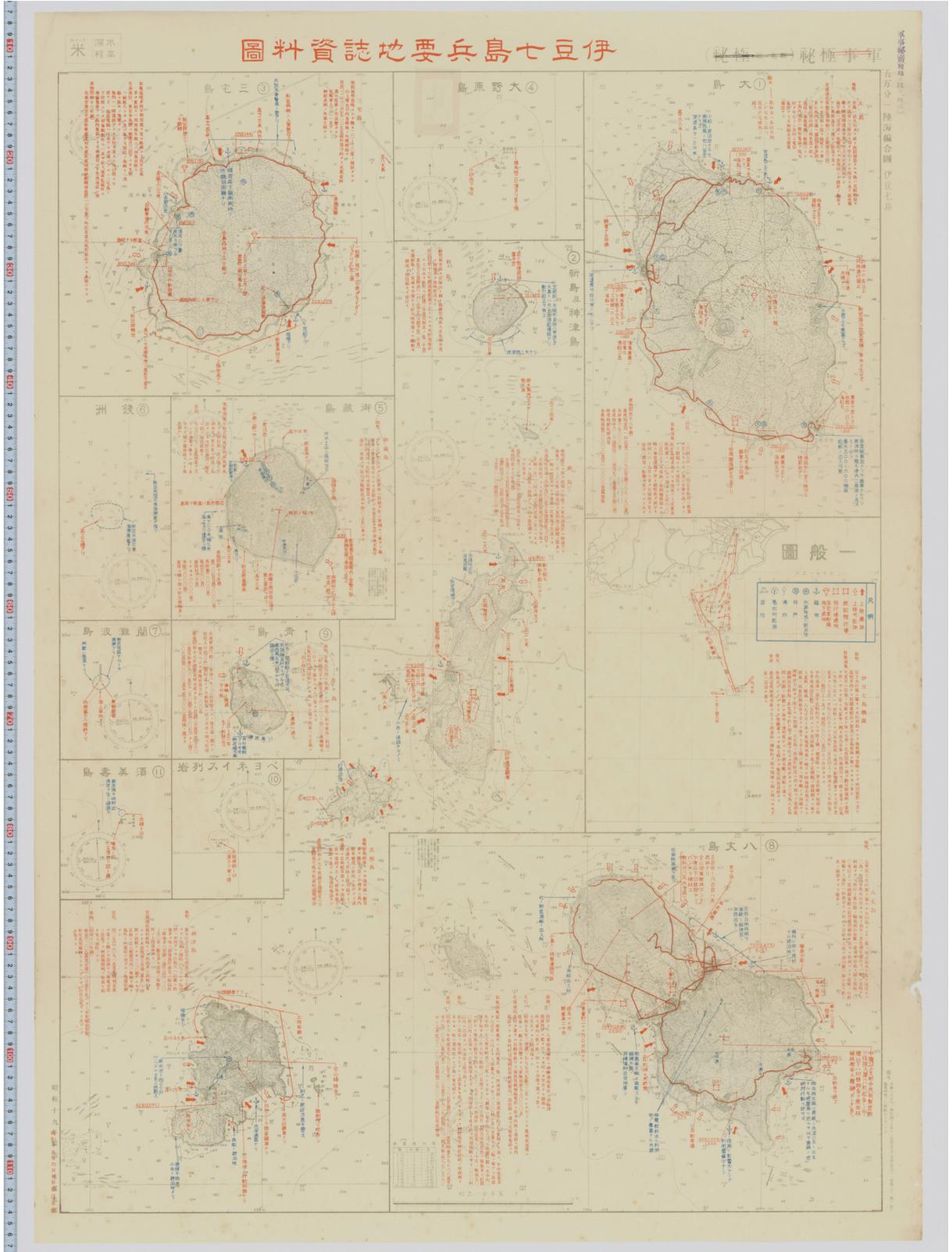


図1 「図A」伊豆七島兵要地誌資料圖 (大阪大学大学院文学研究科人文地理学教室所蔵)

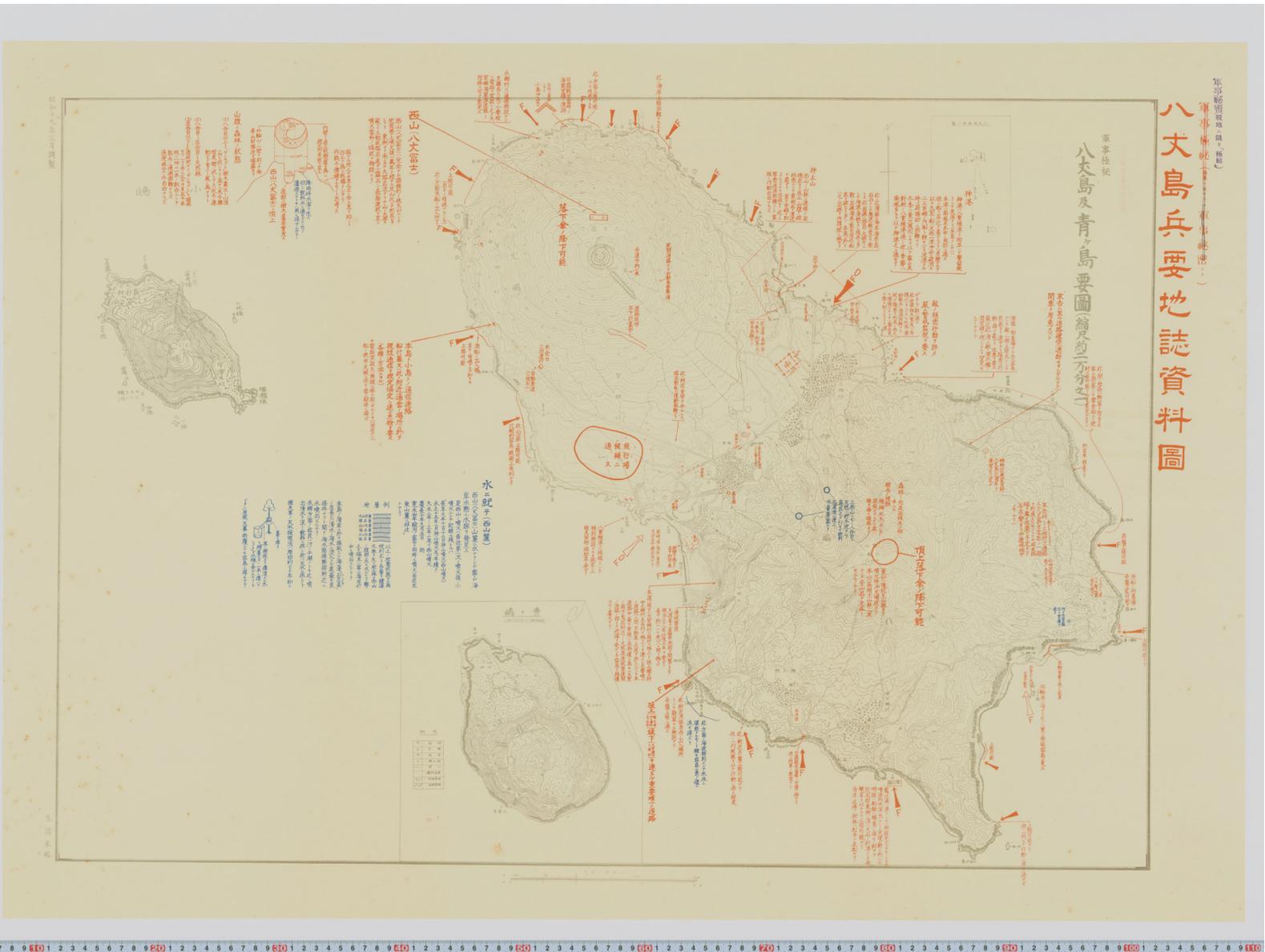


图 2 「图 B」八丈島兵要地誌資料图  
 (大阪大学大学院文学研究科人文地理学教室所蔵)

表2 「図A」の書誌事項

(タイトル)伊豆七島兵要地誌資料図

(作成機関)参謀本部

(縮尺)1:50,000

(出版)[東京]参謀本部

(製版)1944年4月調製(「1944年製版」の上に押印)(下線筆者、以下同様)

(形態)地図1枚:3色刷(黒、橙、藍) 12 maps in 1 sheet; 111×80cm

(注記)

- 12分図;「大島」「新島及神津島」「三宅島」「大野原島」「御蔵島」「銭洲」「蘭 灘波島」「八丈島」「青ヶ島」「ペヨネイス列岩」「須美寿島」「一般図」
- 機密度:軍事極秘(戦地ニ限り「軍事秘密」)を二本で抹消し、軍事秘密(戦地ニ限り「極秘」)(戦地ニ限り極秘)を押印
- スケール・バー(距離尺)あり
- 基図について。「五万分一陸海編合図伊豆七島」\*である。匡郭外に「備考 本図ハ五万分一地形図ヲ主体トシ海部諸元ヲ海図(第五十一号第八十一号)ニ依リ編纂増補ノ上製版セシモノナリ」と付記されている。従って、海部分は海図図式がみられる

\*「陸海編合図」は、陸地測量部(1944:陸地測量部調製地図ノ説明)によると「地形図又ハ其他ノ資料ニ海図ヲ編合セルモノナリ」と説明されている。

表3 「図B」の書誌事項

(タイトル)八丈島兵要地誌資料図

(作成機関)参謀本部

(縮尺)約1:20,000

(出版)[東京]参謀本部

(形態)地図1枚:3色刷(黒、赤(橙)、藍) 3 maps in 1 sheet; 73×103cm

(注記)

- 3分図;八丈島、「八丈島属島一覧」、「青ヶ嶋」(1:20,000)
- 機密度:軍事極秘(戦地ニ限り「軍事秘密」)を二本で抹消し、軍事秘密(戦地ニ限り「極秘」)(戦地ニ限り極秘)を押印
- スケール・バー(距離尺)あり
- 基図について。参謀本部「八丈島及び青ヶ島要圖」(縮尺約二万分之一)1944年製版である。

表4 文献1.の挿図、附図、折り込み地図リスト

no.	図のタイトル	ノンブル	備考
1	波浮港要図	p.9	黒1色
2	元村港要図	p.10	黒1色
3	岡田港	p.11	黒1色, 1:10,000
4	行者窟沙浜要図	p.12	黒1色, 1:10,000
5	海崖ノ状況	p.13	黒1色
6	大島海岸要図	p.14-15の間	黒1色, 1:50,000
7	(海上交通図)	p.20	黒1色
8	(大島ト本土トノ通信網)	p.23	黒1色
9	(風俗図)	p.35	黒1色

(筆者作成)

表5 文献2.の挿図、附図、折り込み地図リスト

no.	図のタイトル	ノンブル	備考
1	伊豆七島全般図	(目次前)	黒1色
2	附図第二 三根村附近、中之郷村附近、大賀郷村	p.11	黒1色
3	附図第三 通信電話回線図	p.12-13	黒1色
4	第四図 八丈島潮流図	p.18-19	黒1色
5	(小島)	p.55	黒1色
6	青ヶ島要図	附表第一前	1:3,500 黒1色
7	青ヶ島	附表第一前	1:20,000 黒1色
8	小島	附表第一前	1:6,000 黒1色
9	八丈島内道路交通要図	最終頁前	1:50,000 黒・赤2色
10	八丈島森林概況図(於昭和十八年九月)	最終頁前	1:50,000 黒・緑2色
11	伊豆七島通信網要図	最終頁前	黒1色

(筆者作成)

表6 文献3-1.(第一編 八丈島)の挿図、附図、折り込み地図リスト

no.	図のタイトル	ノンブル	備考
1	附図第一 各島距離図、一図、島外里程表	p.1	黒1色
2	附図第二 森林ノ状況(昭和十八年末)	p.6-7の間	1:50,000 黒・橙2色
3	附図第三 水利状況要図	p.6-7の間	黒・藍・赤3色
4	附図第四 飛行場及飛行場適地並ニ空輸部隊着地可能地ノ状況	p.8-9の間	1:50,000 黒・藍・赤3色
5	附図第五 上陸適地ノ状況	p.8-9の間	黒・藍・赤3色
6	附図第六ノ一 神湊港要図	p.11	黒1色
7	附図第六ノ二 八重根港要図	p.12	黒1色
8	附図第六ノ三 洞輪沢港要図	p.13	黒1色
9	附図第六ノ四 藍ヶ江港要図	p.14	黒1色
10	附図第七 主要道路ノ状況	p.14-15の間	黒1色
11	附図第八 (島外通信)	p.16	黒1色
12	附図第九 有線通信網要図	p.16-17の間	黒・藍・赤3色
13	附図第十 風向図	p.18-19の間	黒1色
14	附図第十一 四季別観測回数%	p.18-19の間	黒1色
15	附図第十二 局地風推定図	p.18-19の間	黒・藍・赤3色
16	風向ト波浪トノ関係	p.21-22	黒1色
17	附図第十三 潮流図	p.24-25	黒・藍・赤3色
18	小島	p.42	黒1色
19	(位置図)	p.47	黒1色
20	附図第十四 上陸地点並ニ地形ノ細部	p.49	黒1色
21	附図第十五 青ヶ島	p.50	黒1色

(筆者作成)

表7 文献3-2. (第二編 大島)の挿図、附図、折り込み地図リスト

no.	図のタイトル	ノンブル	備考
1	附図第十六 大島海岸附近ノ状況並ニ空輸部隊著陸適地	p.60-61の間	黒・藍・赤・茶色4色
2	附図第十七 波浮港要図	p.62	1:5,000 黒1色
3	附図第十八 元村港要図	p.63	黒1色
4	附図第十九 泉津港要図	p.64	黒1色
5	附図第二十 岡田港要図	p.65	黒1色
6	附図第二十一 行者窟附近砂浜要図	p.66	黒1色
7	附図第二十二 海崖ノ状況	p.67	黒1色
8	附図第二十三 (飛行場適地ノ状況)	p.70	1:30,000 黒1色
9	大島風向図	p.73	黒1色
10	附図第二十四 (海上交通図)	p.78	黒1色
11	(島外通信網)	p.81	黒1色
12	附図第二十五 島内通信網要図	p.82-83の間	黒・藍・赤3色
13	(風俗図)	p.91	黒1色

(筆者作成)